

茨城の教育

茨城県高等学校教職員組合
310-0853 茨城県水戸市平須町表原1-93
telephone 029-305-3075
facsimile 029-305-3317
www.mito.ne.jp/~iba-kou/

県人事委員会が「懲戒処分指針」改正を求める

茨城県人事委員会（江橋湖三郎委員長）は、9月11日、茨城県教育委員会（和田洋子委員長）に対して、「教職員の懲戒処分の指針」を改正するよう求める文書（茨委第204号）を送付した。

問題の多い「懲戒処分の指針」

「教職員の懲戒処分の指針」は、茨城県教育委員会が、2006（平成18）年12月に制定したものであるが、その際、人事院が各省庁に懲戒処分の内容程度を例示した見本の文書をほとんど丸写しにしたため、多くの問題が内在している。【本紙第959号、第959号参照】

同「指針」は、異常ともいえる厳罰方針を採用している。たとえば、基本的には給与カットや勤勉手当減額の対象であり、程度が著しいとしても分限処分どまりである欠勤・遅刻・早退を、即座に懲戒処分の対象とするほか、過失による「公金等」の紛失もただちに懲戒処分の対象とする旨、定めている。

また、飲酒運転厳罰化をもとめる報道の圧力を受けて、2002（平成14）年ころからエスカレートさせた処分方針をそのまま組み込んだため、事故に至らない酒気帯び運転事例であっても即座に懲戒免職とするなど、処分の軽重に関して極度にバランスを欠いた内容になっている。

その一方で、県教育庁職員らによる、労働基準法や労働安全衛生法に反する違法行為については不問に付している。また、勤務時間に関する条例・規則に違反して、教職員に時間外勤務・休日出勤をさせている違法行為も一切問題にしていない。

憲法違反の「政治的行為の制限」

「政治的行為の制限」に関する条項がとりわけ重大な問題をはらむ。

政治的目的を有する文書を配付した教職員は、戒告とする。この文だけを見ると、何のことかわからないが、これは、教育公務員特例法第18条第1項により、教育公務員については、地方公務員法第36条が適用されず、国家公務員法第102条が適用されることとされ、「人事院規則14-7」によって政治的行為が制限されることが関係している。

もとより、1948（昭和23）年の国公法改正と翌年の「人事院規則14-7」施行による国家公務員の政治行為の一律包括的制限については、憲法上おおいに疑義のあるところである（芦部信喜『憲法』第3版、岩波書店、2002年、255頁以下。長谷部恭男『憲法』第2版、新世社、2001年、145頁以下）。

さらに、地方公務員のうち最も大

きな割合を占める教育公務員について、地方公務員法の適用を排除して国家公務員法を適用するに足るような相当の理由は存在しない。

このように、憲法上、地方公務員法上の問題を含む「政治的行為の制限」を、県教育委員会がことさら懲戒処分の対象として明示することは、違憲違法であって容認できない。

行政職員等に拡張することの違法性

以上の根本的問題に加えて、教育公務員特例法の適用対象でない職員、すなわち行政職員や現業職員等についても、国公法に基づく政治的行為の制限を課したうえ、これを懲戒処分の対象としていることが、二次的な問題として存在する。

今回、県人事委員会は、同「指針」の改正を求める「勤務条件に関する措置要求」を受けて審査をおこない（平成20年（措）第2号事件）、教育公務員については要求をしりぞけたものの、それ以外の教育庁職員・学校職員等に関する制限には、法令上の根拠がないとして、県教育委員会に対し「所要の改正が必要」である旨、通知した。

県人事委員会による今回のような「通知」は異例である。決定的なミスをしたうえ、茨城高教組からの指摘を無視し続けた県教育委員会の責任が、きびしく問われることになる。

必修〈道德〉は生徒の道德性の発達をうながすか？（第14回）／視点3（つづき）

『夜のピクニック』の自然描写は感動を呼ぶか？

「ノスタルジアの魔術師」登場

必修〈道德〉の「視点3」は、「主として自然や崇高なもののかかわりにかんすること」であり、その第1項は次のとおりである。

- (a) 自然を愛護し、(b) 美しいものに感動する豊かな心を持ち、(c) 人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。（教員用「指導資料」、89頁。(a)(b)(c)は引用者）

(a)については、^{まどがわやすのり}的川泰宣が教材1で、「地球の青さ」をよりどころに力説した（第969号）。(c)については、村上和雄が教材12で、天理教の「親神様」を「サムシング・グレート」と言い換えて、神道信仰を説いた（第981号）。

そして、(b)の「美しいものに感動する豊かな心」を提示するのが、教材19「夜のピクニック」である。

この「夜のピクニック」は、^{おんだりく}県内の高校を卒業した小説家恩田陸（1968年生まれ、本名^{くまがいななえ}熊谷奈苗）の小説から、星空のシーンと日没のシーンを抜粋したものである。「ノスタルジアの魔術師」（ja.wikipedia.org/wiki/恩田陸）は、「美しいもの」としての自然と、その自然に「感動する豊かな心」をどのように描写するのだろうか。

「グロテスク」な星空

星空のシーンは、前年の「歩行祭」

の際に、山中で友人ふたりとともに星空をみたことを、主人公が回想する場面である。（『夜のピクニック』新潮社、2004年、106-08頁）。

あー、疲れた。と叫んで目を開いた瞬間、目に飛びこんできたのは、文字通り、闇にグラニュー糖をまぶしたような星空である。（中略）

うそー、星ってこんなにいっぱいあるんだ。これ、はっきり言って星の方が黒い部分より面積多いよ。（中略）

あんなにいっぱいあると有り難味がないわね。どんなにきれいなものも、過剰にありすぎると、グロテスクになっちゃうのね。（中略）

うん、星の土砂降り。

贅沢というか、迷惑だねえ。

高校生らの会話という設定であるから、こんなものかも知れないが、「気持ち悪い」とか、「迷惑だ」とまで言いだす始末で、「感動する豊かな心」どころではない。

「障子か何かがそこだけ薄くなって」

もうひとつは海の夕景描写である。主人公（甲田貴子）が、「長い海岸線をなぞって」続く道路を歩きながら見た光景である（96-99頁）。

そこには、不思議な光景があった。

日はとっくに沈んでいる。しかし水平線は明るかった。

空も海も、すっかり夜の^す棲み

かなのに、水平線だけがぼんやりと滲んでいるのだ。（中略）

まるで、水平線が世界の裂け目であるかのようだった。障子か何かがそこだけ薄くなって、向こう側の世界の光が漏れてきているみたいだ。

「障子か何か」の「何か」がよくわからないうえ、「そこだけ薄くなってきている」という比喩も理解できない。結局、肝心の情景が思い浮かばない。

「生徒用テキスト」の「考えるヒント」は「本文に描かれているような夕暮れや星空の場面に出会ったら、どのような気持ちをもつか考えてみましょう」と問いかけるのだが、この描写を読んだうえで「どのような気持ちをもつか考えて」みることは、きわめて困難だろう。

「生徒用テキスト作成委員会」は、永井路子（教材7）だけでは足りず、さらに本県出身の作家を探した。好都合なことに本県の高校の学校行事を題材にした『夜のピクニック』がベストセラーになっている時期だった。読む前に収録することを決定し、いざ作品を読んでみたものの、どう考えても「道德教育」の題材にはならない。思い余って「視点3」の「自然の美しさに感動する心」の例にしようとして、無理矢理2か所を抜粋したところだろう。

なぜ海の日没にこだわったか？

「たかだか人口二十万規模の町」(57頁)であり、歩いて1時間ほどで市街地をはずれる(24頁)。数時間後には比較的大きな「沼」(溜沼)に到達する(53頁)。以後ぐると80kmのコースを歩く間に、ほとんど都市部を通過しない(304頁)。というように、『夜のピクニック』には水戸とその周辺を思わせる記述がある。出発後すぐに通過する運河のある「古い町」(17頁)とは、水戸市の「下市」だろう。この地方都市の、坂道をあがった高台(水戸城本丸跡)にある「進学校」で、制服が定められていないこと、グラウンドが校舎より一段低くなっていること、すぐ近くに鉄道(水郡線)があり、川(那珂川)の堤防が体育の授業の時のマラソンコースになっていることなど、モデルとされる学校を思わせる記述もある(3, 9, 15頁)。

しかしまことに残念なことに、学校名は「北高校」で、行事名は「鍛練歩行祭」となっている。「ど田舎の歩行祭」(286頁)とまで言われる始末だ。そのほか、固有名詞も暗示的描写も一切ない。唯一の例外は市内の「桜川」(48頁)である。

舞台は水戸とその周辺であってほしいという希望を打ち砕く決定的な相違点がある。「生徒用テキスト」に引用されたように、太陽が沈むのが水平線なのだ。海で日没が見られるとなると、太平洋岸ではありえない。(紀伊半島の南紀白浜や伊豆半島の西伊豆町など、水平線への日没が見られる場所もあるが、その他の設定が一致しない。)考えられるのは東北、富山を除く中部、九州の日本海側だろう。都市の規模などからみて秋田や新潟、金沢などではありえない。探せば日本海側の小都市

に適合する場所があるのかも知れない。(なお、金沢については、他の都市という前提での言及がある[86頁])。

しかし、恩田陸はそんなことには全然こだわっていないようである。もし、水戸や水戸第一高校に特別の思い入れでもあるのなら、海での日没の場面を小説中に組み込んでその可能性をつぶすようなことは決してしなかっただろう。

恩田陸は、かねてより「歩く会」は小説の題材として使えると考えていたらしく、小説執筆に先立って実際の「歩く会」に参加し、生徒らと一緒に一昼夜を歩き通して取材をおこなった。雑誌連載開始が『小説新潮』の2002年11月号であるから、おそらくその前年のことだろう。しかし、恩田がネタになると考えたのは「歩く会」だけのようで、水戸や水戸第一高校には少しも拘泥していない。

『夜のピクニック』における描写には、作者自身が高校生の時にたまたま居住した町と在学した学校の記憶が用いられているが、その表現はおざなりで、精緻な描写により町や学校の雰囲気がありありと立ち現れる、というようなものではない。

映画における星空と日没の扱い

『夜のピクニック』は映画化されたが(2006年公開)、海での日没の場面は省略されている。かわりに、西方のなだらかな山への日没シーンがある。ひたちなか市で撮影したもののようなのだが、1分たらずのシーンで、登場人物の科白や独白(「障子か何かがあるがそこだけ薄くなっている」)は一切ない。映画のシーンは、原作

の海の日没シーンのアレンジではない。ついでにいうと、同じく教材19に引用された星空のシーンは、映画化にあたって、山中ではなく、那珂川の堤防で星空を見上げるシーンになった。そのうえ、会話はすべて別のものに換えられた。

原作における海の日没シーンと星空のシーンは、脚本の三澤慶子と長澤雅彦(兼監督)にとっても、取り上げるほどのものではなかったのだろう。ふたつのシーンは、〈道徳〉教材として引用するほどの場面ではなかったというべきである。

太陽は「卵の黄身」

『夜のピクニック』は全体を通して、登場人物の会話と独白が延々と続く。作者は、「歩行祭」のコースについて説明する必要は感じていないらしく、その概略が記されることもない。方位・方角を示すような記述もまったくない。「歩く会」では通行しそうな「畦道」(30頁)を通り、非電化路線である水郡線に「電車」が走っている(334頁)など、具体的な事物や風景に関する作者の無頓着ぶりが目立つ。

恩田は、風景の描写にはほとんど重きを置いていない。海、星空、太

陽がそれぞれ1、2回描写される程度である。太陽への言及は、次のごとくである(234頁)。

太陽は偉大だ。たった一つで世界をこんなにも明るくする。

ゆっくりと昇ってくる太陽は卵の黄身に似ていたが、貴子の頭の中も、同様にどろりとした卵の黄身状態である。

恩田陸にとっての海

この太陽(と頭の中?)の描写にくらべると、海への言及には、登場人物たちの思い入れがあり、多少の象徴性が与えられているようにも見える。次は、主人公(西脇融)の独白である(90頁。傍線は引用者、以下同じ)。

海に目を向ければまだまだ昼の領域だ。波にはまだオレンジ色の縁取りが揺れているし、空も明るい。

昼は海の世界で、夜は陸の世界だ。(中略)

そして、自分たちはまさにその境界線に座っている。

主人公は、昼＝海と夜＝陸との境界線としての海岸線にいる。一方、主人公(甲田貴子)の独白はこうだ(97-98頁)。

空も海も、すっかり夜の棲みかなのに、水平線だけがぼんやりと滲んでいる(中略)

今、あの水平線だけが、昼の最後の牙城なのだ。

主人公は、海は夜(の棲みか)であるとし、それらと昼(の牙城)としての水平線とを対照させる。別々の登場人物の独自のだから、見解が一致しないのは当然かもしれない。しかし、あいついで両方を読まされる読者にしてみれば、ちぐはぐな印象だけが残る。

しかも、主人公にはこれとは別に、次のような独白がある。(76頁。原文のまま)

海は、いつでも境界線だ。その向こうに何かがあって、こちらとの世界を隔てている。

主人公は、海岸が境界線だとするのに対して、主人公は海が境界線だとしていて、ここでも食い違いを生じている。しかも、海は映像としては面であり、実体としては立体であるのに、「境界線」とされていて、非常に解りにくい。

このように、とりとめのない曖昧な叙述が、漫然と並んでいる。それらをあれこれ詮索したところで、結局は徒労に終わる。つまりところ作者には「海」に関するこだわりはない、と判断するほかない。水戸周辺という舞台設定を不可能にしてまで登場させた海での日没であったが、脚本家・監督と同様に、作者自身にとってさえ、たいした意味はなかったようだ。

海を、ペンネームの「陸」と対照させようという特段の意図もないだろう。

恩田陸による描写と対照させて、別の作家の作品から、太陽と海につ

いての一節を引用したい。

……太陽は、ヴァージニア州の大湿原地帯ディズマル・スワンプも、ローマの呪われたカンパーニャも、はたまたサハラ砂漠もかくさないばかりか、地上を何百マイルにもわたって蔓延する荒廃や悲哀のことごとくをもかくさない。海は地球の暗黒面であり、それが地球の三分の二をしめるが、太陽はその海もかくさない。それゆえ、悲しみより喜びのほうがおおいような人間は、真実の人間ではありえない——人間もどきであるか、まだ人間になりきっていないか、そのいずれかである。書物についてもおなじだ。(ハーマン・メルヴィル[八木敏雄訳]『白鯨』岩浪文庫、下、73頁)

「美しいものに感動する豊かな心」

「生徒用テキスト作成委員会」は、「美しいものに感動する豊かな心」の育成をめざして、その「美しいものに感動する豊かな心」の具体的な実例を示そうとしたのだろう。

しかし、結果は見てきたとおりである。『夜のピクニック』における自然描写は凡庸で、特に美しいわけでもないし、感動的でもない。太陽や海や星を前にした時に登場人物たちの心に生起するのは、感動とは異なる反応である。なにより登場人物たちのまなざしは典型的で、未熟である。

『夜のピクニック』に、「美しいものに感動する豊かな心」の育成という課題をゆだねたのは間違いであった、と言わざるをえない。

(つづく)

	副主人公・西脇融		主人公・甲田貴子	
	90頁		97-98頁	76頁
空			夜の棲みか	
水平線			昼の最後の牙城 世界の裂け目	
海	昼		夜の棲みか	いつでも境界線
海岸線	昼＝海と夜＝陸の境界線 視点		視点	視点
陸	夜			